#11.「外圧」

＊

少女のような花のように可愛く初々しい叫び。彼女の目線の先には岩をも打ち砕かんばかりの大斧を持った男が仁王立ち。男は斧にもまけない体格をもったヒューマーのようだ。顔に狂気を宿している。満ち足りた笑みを浮かべ男は斧を振りかぶった。そして躊躇無く少女の顔面に振り下ろす。

「いやぁぁぁーっ！」

絶叫が空間を満たす。

そして静寂。

「ジュゲ・・」

彼女は横たわったまま身動きしない。

「ジュゲ・・・ジュゲ！」

彼女は応えない。

「ジューーーーゲッ！」

その声は乾いた空気に飲み込まれていった。

「わーった。わ・か・り・ました！」

素早く起き上がるとモニターを激しく叩いた。

ＴＶ映像が消える。

「全く、下らぬものばかり見おって。かようなものばかり見るから脳が腐り、精神が腐るのだ。たるみきっている！　二度と拙者の前でつけるな」

クールズは急ハンドルをきり砂漠と一体化していた大きな岩石を避けた。鮮やかなハンドルさばき。この一体ではセンサーはさほど用を成さない。

衝撃でジュゲは半回転、頭をモニターにしたたかぶつける。小さな尻を天高く突き出し、身体を“くの字”に曲げた。

「いったーなーもー。この下手くそ！丁寧に運転しろ！だから俺が運転するって言ったんだ。パルサザーク傭兵隊では最高のドライバーだったんだぞ。それにこの車は狭いんだから何度も怒鳴るなよ。うっさいんだから。一度言えばわかりますよーだ」

「聞かぬお主が悪かろう。それにお主の運転でココを横断できると思うのか」

彼の言うことには一理あった。ナスタイ砂漠は死の砂漠と恐れられている。海のように流れる砂、その中を地面の顫動により岩石が移動している。まるで波間に突如現れる氷山のごとくだ。衝突すれば一たまりもない。投げ出されればそれは死を意味する。中継基地もなく砂嵐により衛星からのナビゲーションシステムも受けられない。最も隠密行動の彼らにとって仮に利用できたとしてもそれを利用することは危険といえた。クールズとて容易いことと鷹をくくってはいられなかった。

「姫様の前にありながらかような運転、そして怒声、誠に面目ありませぬ」

「いいのよ」

そう言ってバーンは本から目を放さずに彼の肩をそっと触れた。
「あーもー退屈ぅ」
かぶりをふるとジュゲは大仰に仰向けになる。その衝撃で軋ませながら車体が少し揺れた。相当年式の古い車体だった。
「仕方なかろう」
「ようやくバーンの為に暴れられると思ったのに」
「そのことか。嫌ならいつ下りてもらって構わんのだぞ」
「はいはい。ど～せ俺はお荷物ですよ～」

二人のやり取りに耳を貸しながらもバーンはいつもと違った神妙な顔をしていた。見るとはなしに窓の外を見る。しかし思考は別の空間を彷徨っていた。
「姫・・・」
「ええ。困ったことになりましたね」
「朱音が我らをたばかるとは」
「いいえ、違うわ」
「え？しかしあれは・・」
「彼女は嘘を言ってない。彼女もそのつもりだった。彼女もしてやれたのよ。ああなるとは思わなかった。銀河警察の介入は予想通りだったのでしょうけど、あの第三者の介入は頭になかった。しかもあれは恐らく予め何ものかによって企てられた偶発的な事故。彼女の計らいにあらずね」

一行は既にミンスクを後にしていた。
ニュースでは大々的な事件としてミンスクでの出来事を報じており、現在は銀河警察の勢力下になっていた。こうなると入ることも出ることも間々ならない。マスコミは締め出され、衛星軌道から撮影を試みている。戒厳令がひかれていた。軌道上から盗撮された僅かな映像と愚かなキャスターの憶測が巷で溢れ出すのにそうれほど時間はかからなかった。彼らの憶測のどれも事実とは異なるものであることは、あの場にいた一部の者しかわかっていないだろう。しかしバーン達にとってそれはどうでもいいこと。既に次なる目標に向かっている。

「一体何ものが」
「クール、あの場に多数のドロイドを確認していましたね」
「御意」
「あのドロイド達は一体何をしていたのかしら」
「最も大きい集団（ア）は朱音を捕らえに集結していました。事前情報の通りです。しかし、次の集団（イ）の目的は一切不明。行動パターンから反銀河警察組織の系統とも思われますが情報不足。小グループ（ウ）は市長の雇った傭兵のようです。恐らく護衛用でしょう。あと、単独行動が一つ。その他目標行動のないモノは排除しております」
「それらの所属と成果は」
「（ア）は銀河警察の対フォース制圧部隊マーズ第六トリンプ。朱音

は逃走、アウイは確保。（イ）は不明。（ウ）は青の傭兵団。ＶＴと称する勢力のクイーン・ビショップそしてアリスの三名。彼らの助けにより市長は逃亡。銀河警察が追っています。単独行動のドロイドはハンターズギルド所属の賞金稼ぎ。元銀河警察隊ドアーズのレンジャー。目的は不明」

「追跡は？」

「御意。（イ）の集団、彼らに相当する情報に一切の該当は無し。量産型ではなくオーダーメイドの可能性が最も高く、構成要素やボディ形状からマイスターの名前すら追跡できませぬ。あれほどの素体であるにも関わらずどの情報にも引っかからないとなると・・」

「彼らの目的が気になりますね。単なる反銀河警察組織であるだけなら構いませんが・・・。彼らの目的が私の目的と方向性が同じなら面倒ですね。ダークファルス相手に失敗は許されません。今回のように機を逃してしまうことになりかねません。あまり残された時間はないでしょう」

「御意。姫、本国にお戻りになられた折にはライザの奴めにキツクお叱りを」

「それは違いますよ」

「しかし、奴めの未来予測が正しければ、機は姫にあったはず」

「いいえ。私が出立した時より、私に機はないのです。だからこそライザは私を止めました。それはあなたもご存知の通り。だからこそ此度は無い機会の中で最大の機会でしたのに。残念です。ライザの忠告は正しかったということですね」

「そうすると朱音のヤツめが早々に逃げ去ったのは」

「彼女にとっても機を逃したのでしょう。ライザが把握できないことを朱音や私が万に一にも把握することは出来ないでしょう。彼女の未来視覚野から逃れる存在なのでしょう。充分ありえますよ」

「ということは自ら意志を持たぬ完全な無機体。脳を持たぬドロイドか、知能の欠片すら見当たらぬ原生生物。それらが組織的に行動している。あのような面倒な能力をもって。考えられないことではありませぬな・・・。今のこの銀河には何が起きても不思議ではない。それにしてもあのような高度なドロイドが完全電子脳とは。この未熟な星域でそのようなタイプは工場か玩具にしか見当たらぬと思うとりましたが・・・」

「それともう一つ」

「御意」

「朱音はダークファルスを所有してない。先日の彼女の余裕の笑みはそれが理由なのでしょう。姉の朱音と妹の朱音のアプローチは別のようですね。それを互いに隠している・・・」

「何ですと」

「妹が所有しているものは全く別な何か」

「何かとは」

「さ～て、何でしょうね」

「誠に申し訳ありませぬ。諜報はそれがしの重大なる役目にも関わらず何のお役にもたてぬとは・・・情けなく口惜しい」

「あなたのせいではないわ。私たちは今完全に流れから外れてしま

っている。陸に打ち上げられた魚ですよ。力がつきれば命絶えるのみ。急ぐ必要がありそうね」
バーンは彼の肩を優しく撫ぜた。
「恐らくあの一団の目的は私達の障害になるかもしれません」
「姫、恥を忍んで申し上げます。ファーファーの力を借りたく思います。連中は恐らくスタンドアロンで行動しております。必要な通信方法が想像できませぬが、有線であればネットワーク上に漏れることは皆無。それでは某も追うこと適いませぬ。万が一も許されない状況で下手な諜報は返って姫様を危険に曝すこと。ファーファーの力を得られればアヤツラの素行を追跡することが容易に適います」
「それは止めましょう。本国も大変な時期です。私の道楽にこれ以上振り回すようなことをしたくはありません」
「しかし、姫様なくして国はありませぬ」
「主君の変わりはあってよ」
「姫以外に主君などあろうはずもありませぬ」
「ありがとう。でもいいのよ。彼女達は皆優秀です。身を弁えております。どうあれ、主君がいなくなれば自動的に主君は現れます。流れに身をまかせましょう。彼女達には彼女達のやるべきことが、我々には我々の目指すものがあります。今しばらく愚かな私の我侭を聞いてもらいましょう」
「姫様、姫様、私は力になりとうございます」
突然割って入ってきた意識に、バーンは表情を崩し、クールズは狼狽した。
「ファーファー、そんな悲痛な顔をしないで。御免なさいね。大丈夫だから。隣で泣いているライザにも気にすることのないように伝えて。私は元気。あなたは悪くない。悪いものは全て私なのだから」
「二人とも身を弁えろ。姫をみすみす危険にさらすようなことをするな。早く去れ」
「姫様・・ご武運を」
彼の一喝に二人の意識は遠ざかった。

「あー、また二人で念話してるでしょー」
先ほどから二人の様子を伺っていたジュゲは後部座席から顔をひょこっりだし、バーンとクールズの顔をふくれっ面で凝視した。
「手をどけろ、運転の邪魔だ」
「やっぱり図星だー。もーいつも私を混ぜてっていってるのにー」
「ニューマンに念話は通らぬと何度いったらわかるんだ。それにお主には関係の話しだ」
「バーン、私にも聞かせてよ～」
「私から念を通すということは、ジュゲの心に進入することになるけどいいの？」
「・・・あ、嘘。ウソだっぴょ～ん」
慌てて後部座席に飛びのくと、正座して手を合わせて照れくさそうに詫びている。
「冗談、それは駄目。だからお願い」

「そんなに頑なに閉じなくてもいいのよ」
「お願い、お願い。見ないで」
彼女をジュゲを笑顔で見つめる。バーンの念話にオンラインするということは、全ての秘密を曝すことを意味する。過去から現在に至るまで全ての記憶、全ての出来事、全ての知識、知性、全ての感情を全開にすること。そうすることで念話の通信手段をバーンが見極めルートを作る。日常会話レベルの念話ではない場合はそうしないとできない。ましてや、それをジュゲからすることは適わなかった。そのような高度な精神技術がジュゲにはない。彼女は自分の闇を、過去の闇を、今も抱える闇を、バーンにだけは知られたくなかった。
「ゴメン、ゴメン、ゴメン、ゴメン」
「な～るほどね」
ニヤリと笑うバーンの笑顔にジュゲの表情が凍りついた。
「ウソ、ウソ、ウソウソ！」
「ウソ～」
豪快に笑うバーンを見て、ジュゲは糸の切れた操り人形のように後部座席に倒れこんだ。また車が揺れる。
「もー、イージーワールゥー！」子供のように身体をバタつかせる。
「あっはっはっは、ジュゲ、ざまーないな。姫様からジュゲにも隠し事をするなと言われている。必要なことは言うから私を信用しろ。そもそも姫様がそのような無粋なことをするわけがなかろう。学習能力がないやつだ・・・」
身を乗り出した彼女はやおらクールズの頭にしがみつき、足を首にまきつけた。「おぉっ、やめろジュゲ、運転の邪魔だ」片手で抵抗するが器用に逃げ回る。
左手にペンを握り後頭部に何かを書こうとしているようだ。
「あったまに来た！後悔するなよなー」
「やめろ、どけ、危ないだろ」
頭を振って抵抗するが、それでもまるっきり意に介さないかという風情でペンの蓋をとった。相当な力で締め上げているのだろう。
「これ以上拙者を侮辱するとただではおかぬぞー」
激しく頭を振りながらも車は真っ直ぐ目的地を目指す。バーンはお腹を抱えて笑いながら、同時に次なる目的地に思いを馳せていた。
＊
ミンスクで一体何が起きたのか。
会談の翌朝、バーンの元に使いがきた。使いは一言こう告げると消えた。
「此度の作戦は本日正午」
しかしバーンは、
「クールズ撤退用意。十分で街を検索、可能な限り情報をプールし完了後撤退します」
そう告げると動きは速かった。ジュゲは一瞬目を丸くしたものの状況を理解し、何の疑問も投げず即座にホテルを後にした。非常事態時の落ち合う場所は常に決めている。
バーンは普段からは想像も出来ない韋駄天のごとき速さで街頭を疾

走した。誰も彼女の存在を気づいていないようで見向きもされない。五分も走ると、どこからくすねて来たのかクールズがサンドビークルを走らせ姫に横付けする。あたかもそこに今までいたかのような自然さでバーンはビークルに乗りこんだ。ビークルが走りだすと同時に車の天井に激しい衝撃がはしり後輪がワンバウンドする。その音に驚いた通行人が振り返る頃にはビークルは彼方にあった。

十五分後、銀河警察が上空から降下し、空を埋め尽くすと、どこからともなく銃撃が始まった。同時にセンタービルが前触れも無く崩壊。街は一瞬にして地獄絵図の様相を呈する。ニュースはミンスク独立を企てるフォース一派ダニエル・スクラウトの反乱と報じる。三時間後、ミンスクは完全に銀河警察の統治下におかれ、戒厳令がしかれる。

この結果誰が得をしたのか。

それは銀河警察である。長年の独立統治都市であったミンスクを手中に収めたことになるからだ。あくまで表面上の話だ。それでも外部勢力に対してのアピールは絶大と言えた。しかしこの強引なやり方が更なる揉め事の種になろうことになるとは、当の銀河警察だけが気づかなかった。

　そして何より、肝心の目標である朱音を逃し、彼女が所持していると思われたダークファルスをも逃すことになる。挙句にミンスクの市長さえをも逃した。失態のオンパレード。それらが公表されたのは一月も後のことである。

「ひへっへっへっへっへ。間抜け間抜けの銀河警察ちゃ～ん」

　下卑た笑い声を上げる。

「あれが朱音か。ダークフォースとかいう輩だそうだな。データをとりたかったが即座に逃げ出すとは。噂ほどではないのではないか」

「馬鹿を言うな。アイツはいとも簡単に逃げおうせたではないか。五重のフォースフィールドをハナクソをほじるように簡単に飛びやがった。並のフォースなら一重で充分なシールドだ。未知数も考慮に入れて五重にしたにも関わらずだ。計算外にもほどがある。同じダークフォースでもあの赤いのはシールド四で引っかかった。手下ですらシールド三を突破するなんてどんな連中なんだ。データが全く無い理由がわかる気もするな。あれではとりようがあるまい。ただ、これでわかったことがある。捕らえることは時間の無駄だ。始末したほうが早い。我らにはアレがある」

「アレが動けば真っ先に掃除してくれるか。我らが動くこともないな。けひゃひゃひゃひゃひゃ。まだ餓鬼のようだったが、ヤツの悲鳴をコレクションしたいのぉ。どんな可愛い声を出してわめくのか、想像しただけで腹が減る」

「ママの声は飽きたのかボーニ」

「わかってないね～。ママは癒し、ヤツらの悲鳴は食欲増進だよ」

「あの餓鬼が悲鳴をあげるかね」

「あげるさ、あげさせる。必ずな」
「けひゃひゃひゃひゃ」
「あまりに動き回るな。我らの動きを知られたら面倒だ」
「わかってるさ、我らはアヤツらのように愚かではない」
「それしてもお前らの会話は無駄が多い。いい加減オプションを外したらどうだ」
「許可は得ている。ヒューマーを利用するにはしかたなかろう。それになんだ、案外面白いぜ感情というヤツは」
「癖になっちゃう〜ん・・・てな。けひゃひゃひゃひゃ」
そう言うと、互いの指に接続されていた有線を外し、瞬時にその場から姿を消した。

てっきりバーンはダークファルスは朱音が押さえていると思っていた。クールズが銀河遺産で火災があったとの情報を得た時、朱音がダークファルスを奪取したと考えた。さすがのバーンでもアレを察知することは適わない。何せ活動を停止しているダークファルスは鉱物と同じだ。大きなモノでもない。それがいざ活動を始めるとエネルギーの限り、自由に、あらゆる場所を、瞬時に行き来することが出来る。フォースのリューカーように予め座標が頭に入っている必要はない。憎悪ありし所にダークファルスあり。それは繰り返された過ちの歴史が証明していた。ダークフォースは精神を喰らう鬼のような存在であるとバーンは考えている。故に能率を考えれば、フォースの多いミンスクで再生することは至極てっとりばやい方法といえた。アレも生きている以上は食料を欲している。操られながら同時にチャンスを狙っているに違いない。多くの食料を得て、それが一定量の捕食を越えた後、アレによる侵蝕が一気に始まるだろう。そうなったらラグオルは終わりだ。
そうなる前に姉の魂を開放しなくては・・・バーンはそう考えていた。残された時間はそうなかった。

一行は銀河警察第五十七番都市アルタイルに到着していた。目標はミンスク元市長（銀河警察統治時点で自動的に失脚）の確保。彼は何か事情を知っているとバーンは感じた。手がかりはそれしかない。クールズは情報のつかめなかった謎のドロイドらの足跡を掴むため本格的な単独諜報活動に入っていた。クールズという膨大な情報源を失ったバーンらは、エルディナにコンタクトをとり傭兵団の情報を集める。水を得た魚のようにエルディナは活動し、その類稀なる才能を発揮しほどなくしてキャッチする。
「青のＶＴはワールドハンターズギルドのＳＳ級ターゲットとして登録されてるのよ。私も行かせて！絶対に役立つから。お願い」
彼女の危機迫る懇願にバーンは微笑んだ。
それを「よし」と判断した彼女は取るものもとらず出立。ギルドチームを編成し感動の再会を果たす。彼女とてバーンのいぬまにノウノウと過ごしていたわけではなかった。積極的にギルドの依頼をこなし、今ではワールドハンターズ免許クラスＢを取得。広域活動を

認可されていた。集まったギルドメンバーは三人。どいつもこいつも曰くありげな連中ばかり。当然バーンらと一緒に行動することは許されない。彼女らはあくまで民間人としての資格しかないからだ。そのため、彼女は連絡用にハリュウトをバーンつけることを提案する。バーンは黙ってそれを受け入れた。喜んだのはジュゲだ。

「クールズが知ったら何て言うでしょうね」

単独諜報に入ったクールズに連絡する方法はない。完全なる隠密モードに入り一切の外界との連絡を断つ。当然知るよしもないだろう。また、ハリュウトは今回の任務用に特別にチューンナップされていた。

「姫様、青のＶＴには多くのギルドチームが組織的に動いています。万が一にギルドチームに遭遇した際は・・」

「だいじょーびエルねーちゃん。その辺は俺が把握してるから。バーンに説明しておくよ」

「お願いするわジュゲちゃん。姫様、現在前市長は別なチームのＳ級ターゲットにもなっております。ギルドでは前市長と青のＶＴとの因果関係を正確には把握しておりませんが、アルタイル入りの可能性もあり、そうなった場合、複数のチームが投入されることになると思います。何よりも危惧されているのは、アルタイルは今軍事バランスが微妙な状態にあります。先のミンスクでの事件から銀河警察への不信感が高まっているんです。その緊張感が高まっている最中にありとても危険です。再度確認しますが、脱出ルートは本当にこちらで確保しなくても大丈夫なのですか」

「ええ」

「ねーちゃん、バーンが大丈夫っていうんだから大丈夫なんだよ」

「とにかく心配なんです。どうか、どうかお大事に。何かあったらハリュウトを通して連絡して下さい。アルタイルの情報はハルに常にストックさせますので、引き出してください」

「ありがとうねエル」

「そんな、姫様のお役に立てて私本当に嬉しいです」

「今からあなたは自分のことだけに集中して。きっとあなたはやり遂げますよ」

「姫様・・・」

「よっしゃー、今度こそ暴れるぞぉー」

「メタリックー」

「あははは、ハルはまだその口癖なおってないのか」

「メタリックー、メタリックゥ～」

はしゃぐ二人に対し、バーンの表情はいつになく冴えなかった。それは前日のライザから念話が頭にあったからだ。

「姫様、そちらの方角はいけません。方位が悪すぎます。お願いですクールズの言うように結果を待ってから行動にうつして下さい」

「ライザ・・それで間に合うの」

「それは・・・」

「ありがとうライザ。でもね好機と思われたミンスクでの機会を逃した時点で最早これしか道はないのかもしれません。あなたの言った通りね。心から詫びるわ」

「そんな姫様。私共が至らないばかりに・・・」
「いいえ、貴方達は本当によくやっているわ。悪いのは私、それでもね私は救いたいの姉さんを。だって、たった一人の家族なんだから。他の皆がそれを望まなくても私は望んでいる。全てを捨てても。だから悪いのは全て私」
「姫様、せめてミモレットをお付に送らせて下さい」
「ありがとう。でも、ミモはお留守番しておいて。彼女は今そちらで必要な存在よ。今の状況は」
「第百三十五次防衛戦をクリヤしました。ファーファーとミモレットのお陰です。ご帰還後に彼女達を褒めてあげて下さい・・・」
「泣かないでライザ。本当にありがとう。私は幸せ者です。必ず姉を連れて帰ります。そうすれば全ては解決されます」
「姫様こそ必ずお戻り下さい。それが国民全ての願いです。それに万が一でもあれば、バニラ博士とミモレットが我らを許さないでしょう」
「ふふふ、そうね。戻るわ。そうしたら皆で練成会を開きましょう」
「どうかご無事で・・」
「皆こそ」
バーンは空を見上げた。
(風向きが変わりそうね・・)
「ひめーシャッチョさんの位置わかったかもー」
「シャッチョじゃなくてシチョウ、しかも元ね」そう言ってジュゲは噴出した。
「シッチョさんっぽい人、市内の防犯カメラに複数記録あり〜」
バーンは立ち上がり「それでは参りましょう」と　言った。その姿には今までにない張り詰めたモノがあることをジュゲは感じていた。バーンは何かが狂い始めていることを感じていた。ソレが何か、自分でもわからなかったが、ソレはどこか冷たい感覚を伴い前方に垂れ込めているとだけ感じた。しかしそれでも姉を救いたいという気持ちには一切の迷いがない。とどのつまり、それは自分の歩む道を指し示していることを意味していた。